

これが総合診療流！ 患者中心の リハビリテーション

全職種の能力を引き出し、患者さんのQOLを改善せよ！

contents

◆ 序	佐藤健太
-----	------

第1章 総合診療 × リハビリテーション

1 総合診療とリハの共通点・親和性	佐藤健太	10 (218)
2 リハのエビデンス、すごいところ	菅藤佳奈子	22 (230)
3 患者さんの意欲を引き出す、患者中心のゴール設定	今江章宏	32 (240)
4 家族を支援し一緒に取り組むための、家族志向のリハ	丸山淳也、松坂英樹	39 (247)
5 地域包括ケアシステム時代の、リハが活きるまちづくり	井階友貴	48 (256)
6 総合診療医のためのリハ研修		
～総合診療とリハを両方習得し融合させられるキャリアプランとは？	花本明子	55 (263)
コラム 総合診療医がリハを学ぶ意義		
～非専門医へのリハ普及活動に尽力するリハ専門医より	上月正博	63 (271)

第2章 総合診療医のリハの実際（評価～指示～実施の注意点）

1 総合診療医にもできる、簡易的フィジカル評価	佐賀加奈子	66 (274)
2 総合診療医視点にリハ視点を融合させた、ICFによる総合評価	勝田琴絵	73 (281)
3 総合診療医に必須の、リハビリテーション栄養とサルコペニア	若林秀隆	82 (290)
4 総合診療医も必見の、リハメンタル評価～意欲障害（アパシー）の鑑別診断	堀口 信	91 (299)

5	総合診療医が知っておくべき、リハを導入するとき／控えるとき	五十嵐衣つ華	99 (307)
6	総合診療医でもここまで書きたい、リハ処方箋記載のポイント	佐藤健太	105 (313)
7	リハチーム内における総合診療医の役割	松浦広昂	116 (324)

第3章 リハにかかわる専門職種たち

1	総論：リハにおける多職種連携	齋藤正美	124 (332)
----------	----------------	------	-----------

リハの3大セラピスト

2	PT（理学療法士）	伊藤賢太	133 (341)
3	OT（作業療法士）	飯尾智憲	140 (348)
4	ST（言語聴覚士）	笛谷正吾	146 (354)

看護・介護系の専門職

5	Ns（看護師）	鈴木桂子	153 (361)
6	CW：ケアワーカー（介護福祉士）～現場で働くケアワーカーとともに進める維持期リハ	阿部哲理	157 (365)
7	MSW：医療ソーシャルワーカー（社会福祉士）	青木達人	162 (370)

コラム リハ関連職種たちの、アイデンティティ確立までの歴史と現在の立ち位置

.....	佐藤健太	168 (376)
-------	------	-----------

第4章 現場で役立つ！ 診療科別（障害別）リハビリテーション

神経筋骨格系（肢体不自由）

1	神経系 ①脳卒中	後藤郁美	176 (384)
2	神経系 ②神経変性疾患	後藤郁美	183 (391)
3	運動器系—関節症、運動器不安定症	瀧谷仁美	191 (399)

内科系（内部障害）

4	心臓リハビリテーション	大閑祥子、藤原 大	203 (411)
5	呼吸器リハビリテーション	山田大志	211 (419)
6	腎臓リハビリテーション	上月正博	219 (427)

老年・虚弱系

7	認知症	平原佐斗司	227 (435)
----------	-----	-------	-----------

8	誤嚥性肺炎	鵜飼万実子, 岡田唯男	236 (444)
9	廃用症候群, フレイル	佐野康太	248 (456)

悪性腫瘍系

10	がんリハビリテーション	宮越浩一	257 (465)
----	-------------	------	-----------

第5章 現場で役立つ！診療場面別（病期別）リハビリテーション

病期別

1	ICUでのリハ	福家良太	266 (474)
2	一般急性期でのリハ	堀 哲也	273 (481)
3	回復期でのリハ	和田恵美子	279 (487)
4	地域包括ケア病棟でのリハ	金 弘子, 吉田 伸	287 (495)

場所別

5	通所リハ（デイケア）・通所介護（デイサービス）での生活期リハ	松下貴裕, 松谷 祥	295 (503)
6	自宅でのリハ（訪問リハ）	橋本茂樹	303 (511)

◆ 索引

314 (522)

◆ 執筆者一覧

317 (525)

謹告

本書に記載されている診断法・治療法に関しては、発行時点における最新の情報に基づき、正確を期するよう、著者ならびに出版社はそれぞれ最善の努力を払っております。しかし、医学、医療の進歩により、記載された内容が正確かつ完全ではなくなる場合もございます。

したがって、実際の診断法・治療法で、熟知していない、あるいは汎用されていない新薬をはじめとする医薬品の使用、検査の実施および判読にあたっては、まず医薬品添付文書や機器および試薬の説明書で確認され、また診療技術に関しては十分考慮されたうえで、常に細心の注意を払われるようお願いいたします。

本書記載の診断法・治療法・医薬品・検査法・疾患への適応などが、その後の医学研究ならびに医療の進歩により本書発行後に変更された場合、その診断法・治療法・医薬品・検査法・疾患への適応などによる不測の事故に対して、著者ならびに出版社はその責を負いかねますのでご了承ください。